
IF 「仮定」の世界

宇野 宙人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IF 「仮定」の世界

【Nコード】

N8191X

【作者名】

宇野 宙人

【あらすじ】

IFという超能力が普通に存在する世界。その世界で平和な日常を望む主人公、鏡音友人はある日の帰り道に一つの事件と一人の少女に出会う。

そして、そこから始まる大きな事件に友人は嫌々ながらも巻き込まれていく。

ブローグ

ここは超能力が人間の技術によって理解・開発された未来の世界。超能力はinterfere force（干渉力）縮めてIFと呼ばれている。

その能力は、触れずにモノを動かす、遠く離れた人の意識を読み取る、炎や電気を生み出すなどさまざまあり、その力は計り知れなかった。

故に世界はIFの力を受け入れる方向へと流れ、IFの力によって世界は大きく進み、変わっていった。

その結果、IFは世間に浸透し、IFが起こす常識はずれな事象も今では日常の一部と化していた。

第1話 「鏡音友人」の世界（前書き）

ども、宇野宙人です。初投稿なのでいろいろと戸惑いの連続です。拙い文章ですが、頑張って書きました。感想や文に対する指摘があれば、気軽に送ってください。

第1話 「鏡音友人」の世界

さて、今の状況をざっと説明しておこう。

オレの目の前には、およそ十数人のガラの悪い不良たち。そして、すぐ後ろにあるのは高い壁。

おまけにここは路地裏の一本道で、人が来るようすも無い。

十人中十人が絶体絶命と答えるであろうこの場面の真ただ中にいる、オレこと鏡音友人は^{かがみね ゆうと}どうしてこんな状況^{こと}になってしまったのか。それは三十分ほど前まで遡る。

発端はいつもと変わらない帰り道を一人で歩いている途中のことだった。

見慣れた町並み、見慣れた空、そして見慣れた自分の家にもう少しで帰れるというところで、鞆からいきなりオレの携帯の着信音が鳴りだした。

携帯を取り出して、画面を見ると、そこにはオレがよく知っている名前、七橋奏^{ななはしかなで}の三文字があった。

（あいつ、また何か厄介事にでも首突っ込んだのかなあ。）

奏はオレの幼馴染で、とんでもなくお人好しな性格をしている。

そのため、困った人を見過ごしておくことができず、そのせいでいろいろなトラブルにしょっちゅう出くわしているのだ。

そしてそのときは、（迷惑なことに）ほとんどの場合、一緒にいるオレも巻き込まれている。

故に、奏から電話をもらったとき、真っ先に何かトラブルが起こったのではとオレが思うのも無理のない話というものだ。

だが、奏と一緒にいるために、オレがトラブルに巻き込まれることは多々あるが、奏からオレを直接トラブルに巻き込んだことは、一度も無い。（そもそも奏は、オレと違って周りを巻き込もうとはせず、できるだけ自分の力だけで解決しようとするからな。）

考えすぎかと思い、俺は電話に出る。

「はい、もしもし」

「・・・・・・鏡音友人か？」

奏とは明らかに違う、低い男の声が携帯から聞こえてきた。

「・・・・お前は誰だ？奏じゃないな」

「そうだ。お前の友達は今、俺たちが預かっている。返して欲しければ、二丁目にある廃工場まで来い。おっと、警察や先公には連絡すんじゃねえぞ。お友達を無事に助けたければな」

フハハハッと耳につく高笑いを最後に電話が切られた。

（やれやれ、また面倒なことに巻き込まれたのか。あいつは。）

はあゝと長いため息の後、オレは渋々奏を救うべく廃工場へと向かった。

その後ろでじつとオレを見続けている一羽のカラスに気付いたのは、そのすぐ後だった。

オレが電話を受けてから、三十分後。オレは二丁目の廃工場の裏側にいた。ここは、中にいる人間からは死角となっているため、オレの存在は気付かれていない。

この廃工場は不良の溜まり場となっていることで有名な場所であり、現に、今も十数人の不良たちがたむろっている。

その中で、おそらくこの不良のボス的存在の奴(たぶん、オレに電話をしてきた男)の隣に、明らかに不良とは違う少年・奏がいた。(名前のせいで誤解されることが多いが、奏は男だ。しかも結構整った顔立ちをしていて、女子にとっても人気がある。友達とはいえ、むかつく。)

ここから見る限り、奏はかなりの暴行を加えられたようだ。体中がぼろぼろで、さっきから全く動いてない。

(まあ、あいつにとってはこんなのは日常茶飯事なんだが、しかし、奏を捕まえたということは、あいつらの中に能力者がいるな。)

奏は能力者なので、普通の不良が奏を捕まえるのは極めて困難なこ

となのだ。

（まあ、そんなことはどうでもいいか。オレは、あいつらと共に作戦通りにやれば何も問題ないはずだ。）

「んじゃ、五分後に今聞かせた作戦を開始するから、これ自分の周りに置いて待ってるよ」

オレはそう言っていると、手に持っていたビー玉を目の前にいるカラスにくわえさせた。

五分後、オレは百円ライターで、仕掛けておいた花火の導火線に火を点け、急いで物影に隠れる。

シュルシュルシュルル…パーン。

結構大きな音が響き渡った。当然、この音を聞いた不良たちが何事か、とやって来たり、音のした方へ注意を向ける。その一瞬の隙を俺たちは突く。上手くやってくれよ！みんな。

「オイ！あいつはどこへ行った。まさか、逃げられたのか」

「分かんねえよ！あの音に気を取られてる間にいなくなっちゃったんだ！」

怒鳴り声の後に困惑する声、こういう声が聞こえてきたということ、作戦が成功したということだ。

ミッションコンプリート。

さて、オレは奏を取り戻したから、後はこの物影に隠れながらこのまま不良たちがいなくなるまでやり過ごせば何も問題ない……

チャラララーラッラッ

ってオイ、何でこのタイミングで携帯が鳴るんだあ！

「ん？そこに隠れているのは誰だ！」

ああ、もう。不良のボス的存在だった奴に見つかっちまったじゃねえか。

このままじゃヤバいので、オレは全速力で廃工場から逃げた。すると当然のごとく、不良どもが追いかけてくるわけだが……。多すぎるだろ！ていうか何で全員がこっちに向かって来るんだよね！

そんなこんなで現在にいたるわけである。オレの携帯に電話した奴め、覚えてろよ！

「散々逃げまわっていたようだが、これでお前はもう逃げられないぜ」

不良のボスの存在・・・もう面倒だから不良Aとでもしておこうか、不良Aが勝ちを確信したような笑みを浮かべながら言った。

「ったく、無能力者のくせに、この俺を手こずらせやがってよお！だが、それもここまでだ。さうて、あのむかつく善人気取りの奏とかいう奴の分まで、憂さ晴らしさせてもらおうか！」

不良Aはそういうと、手の平から一瞬でサッカーボールくらいの大ささの炎の球を出した。やはりこいつは能力者だったか。

パイロキネシス
発火能力。文字通り、炎を作り出す物理干涉系のIF。

炎を作り出すときの速さといい、大きさといい、結構な手練のようだ、とオレは目の前で起こったことを観察していた。

「ハッ、こいつ、ビビッて声も出せねえってか」

「仕方ねえよ。これを見りゃ、誰だってビビるさ」

「違えねえ」

不良Aとその取り巻きどもは、黙っているオレを恐怖で口が開かないと勘違いしたらしく、ゲラゲラ笑い始めた。

「オイ、友人とかいったか。今すぐこの俺に泣いて土下座すれば少しは痛い目みないよう、考えてやってもいいぜ」

ニタニタと笑い、明らかに相手がどんな反応を示すか楽しんでいるような声。聞いているだけで、不愉快になるな。

「オイ、どうした。何か言ってみてらどうなんだ」

はあ。俺は盛大なため息（今日で何回目だ）をついた後、不良Aに視線を向けながら言った。

「不良A」

「はあ？」

「お前は二つほど間違っている」

「ああ？何が間違ってるんだ？」

今まで黙ってた男が急に口を開き、意味深なことを言ったので、不良Aは自分が名前と呼ばれてないことには突っ込まずに聞いてきた。

「まず、初めにお前はオレに『もう逃げられない』と言ったな。確かに、今オレは三方を不良に囲まれているけど、ここがガラ空きだ」

オレは後ろにある壁を軽く叩きながら言った。

「はあ？何言ってるんだ、お前は」

全く意味がわからないという表情を浮かべた不良Aと取り巻きどもを無視して、話を続ける。

「そして、もう一つの間違いは……」

そう言うやいなや、オレは垂直な壁を走り出した。

「オレは無能力者いっぽうはんじんじゃないんだよ」

第2話 「仲間たち」の世界（前書き）

キャラクターを少々作りすぎました。（上手く回せるか心配・・・）
第2話です。

第2話 「仲間たち」の世界

翌朝、学校に行く途中で、オレは奏を見かけたので声をかけた。

「よつ、奏。怪我はもういいのか」

「ん？ああ、友人か。うん、まあね、そんなにひどくなかったし。それよりも、今回友人たちにはいろいろと迷惑かけたね」

「いつものことだ、気にしろよ」

「そこは『気にするな』と言うところじゃないの？」

「お前がオレを巻き込むことに気にしなくなったら、オレの体が持たん」

「うつ、ごめん。でも、大丈夫だった？僕を助けた後で、山吹が携帯に電話したみたいだけど全然出なかったから、何か大変な目にあつたんじゃないかって心配してたよ」

「（その電話のせいで、オレは大変な目にあつたんだが、）まあ、大丈夫だったぜ。これでも一応、お前と同じ能力者だからな」

あの後、悠々と壁を登り切り、反対側に渡ったオレは、不良どもから無事に逃げきることに成功した。

「にしても、奏。一体何があつたんだ？」

どうせこいつのことだから、人助けだとは思うが。

「帰り道で、中学生くらいの女の子があいつらに襲われそうになつてゐるのを見かけてね、その子を逃がせたまでは良かったんだけど、あの炎を使う能力者に捕まっちゃったんだよ。それで、僕を痛めつけても怒りは治まらなかったみたいで、友達も痛めつけてやろうとあいつらは友人に電話をかけたんだ」

オレはあの不良どものむかつく言動を思い出しながら、あいつらならそれくらいのことはやりそうだなと思った。全く、酷い奴らだ。

「とうかさ、お前も見境なく行動するなよ。この町には学生能力者警団キープ・ガードだっているんだし、そこに連絡するだけでも良かっただろ」

学生能力者警団キープ・ガードとは、能力者・無能力者の犯罪や暴動を、取り締まったりする、能力者による警察の学生版で、定期的に町をパトロールしている。

「でも、学生能力者警団キープ・ガードだって完全に犯罪を未然に防げるわけじゃないでしょ。連絡してる間に怪我したら元も子もないし」

「それは、そうだが……」

奏がかばって、怪我したって元も子もないと思うが。

「つーか、それならお前が学生能力者警団キープ・ガードに入ればいいじゃねえか。そうすれば、お前もいろいろと都合がいいだろう」

「僕は、あくまで一般人として自由に人を助けたいんだよ。義務とか規則とかじゃなく」

「さいですか」

それはまた、殊勝な心掛けで。

「それに学生能力者警団キープ・ガードは厳しい適性テストをくぐり抜けたエリート集団、僕なんかとは格が違うさ」

まあ、確かに学生能力者警団キープ・ガードは毎年、数百人もの志願者がありながら、合格者は十人、二十人くらいしかいない超倍率といわれている。

現にオレの通う学校にも何人かの能力者はいるが、キー・ブ・ガード学生能力者警団は一人もいない。

（でも、キー・ブ・ガード学生能力者警団と同等かそれ以上の実力者なら一人いるけどな）

オレは彼女のことを思い浮かべながらそう思った。

「それはそうと、今朝のニュースでやってただけで、昨日の夜中に刑務所から囚人が集団脱走して、未だ行方知れずなんだって」「マジか！それはまた、物騒だな。もしかしてそいつらって能力者か？」

「うん、能力でたくさんサイキックの罪なき人の命を奪った凶悪犯だって、テレビで言ってたんだ。警察の捜査によると、空間干涉系のIFを使う人間が外部から手伝わらしいんだって」

なるほど、空間干涉系か。

IFには大きく分けて3つの種類がある。

まず初めに、物理干涉系。これは物体の運動や、性質・形態変化、自然現象なんかに関わる能力で、代表的なのは念動力や発火能力。サイキック

次に空間干涉系。空間に関わる能力で、代表的なのは瞬間移動。テレポート

最後が精神干涉系。テレパシー人や動物の思念（精神）・五感に関わる能力で、代表的なのは念話と、こんな感じで分けられている。

ちなみに、3つの中では物理干涉系のIFを持つ人間が一番多く、空間干涉系が一番少ない。

(割合にすると大体 物：精：空＝6：3：1 となる)

「だけど、そんな危険な奴らなら能力者専用の刑務所に入れられているはずだろ。たとえ、高度な空間干涉系の能力者が手伝っても上手くいくとは思えないけど」

「だから、警察の方でも悩んでるみたいだよ。何せ、こんなことは前代未聞だからね」

そんな話をしながら、学校へ向かっていくと小学生くらいの女の子が一人、木を見上げておろおろしていた。当然、奏はその子をほっとけるわけがなく話しかける。

「どうしたの。何か困ったことでもあったのかな。」

奏が優しく声をかけると、その子は恥ずかしそうにうつむきながら、答えた。

「あ、あのね、カナの帽子が風で・・・」

見ると、木の上の方の枝に黄色い学生帽が引っかかっている。かなり高い場所にあるうえに、木の幹は太く、道具もなしに登るのは無理そうだ。

「あれか。大丈夫だよ、カナちゃん。今すぐ取ってきてもらうから」

そついうと奏はそこらへんの電線にとまっているカラスを見つめたとすると、突然カラスが羽をはたかせて飛び、木の枝に引っかかっている帽子をくちばしでくわえて奏の手の中に持ってきた。奏はその帽子を笑顔で少女に渡す。

「はい、どうぞ。」

「うん………ありがとう。お兄ちゃん」

カナという子はちょっと驚いていたようだが、帽子をとってくれたことに感謝してお礼を言った。

「どういたしまして。もう、風に飛ばされないように気をつけてね」
「うん！本当にありがとう」

カナちゃんは、奏から手渡された帽子ををかぶりタッタッタと走って行った。

「しかし、いつ見ても面白いな、お前の能力は」

去っていくその子が見えなくなったときに、オレは口を開いた。

そう、これが、奏の能力・獣王^{ソロモン}。目で見た動物（脊椎動物のみ）と意識をつなぎ、五感を共有し操る精神干涉系のIF。

奏はこの能力を使って、いろいろなトラブルが起こった場所を把握し、解決のために動いているのだ。

「その能力と心意気があれば、学生能力者警団^{キブ・ガード}にとっては貴重な存在になると俺は思うんだけどねえ」

全くもって、残念だ。奏は努力家だから頑張ればイケるかもしれないのに、学生能力者警団^{キブ・ガード}に入ろうとしないなんて。

「で、本音は？」

「奏が学生能力者警団^{キブ・ガード}に入れば、オレへの被害が減ると思ってな」

「そんな事だろうと思ったよ」

オレたちは再び学校へと歩き始めた。

オレたちが通っている、夕波高校はどこにでもある普通の公立高校だ。

偏差値もとりわけ高いわけでも低いわけでもなく、強豪と呼ばれてる部活動もない。

強いて特徴があるとすれば、入学時に全ての新入生に座右の銘とか目標とかを四字熟語で書かせることだろう。ちなみに、オレが書いたのは『他力本願』で、奏は『一日一善』だ。

オレたちが1 - Aの教室に入ると、一人の男子生徒が話しかけてきた。

「よう、友人に奏。昨日は大丈夫だったか？」

声をかけてきたのは、クラスメートの前原山吹。まえはらやまぶき

つんつんと、とがった髪の毛が目立つ、体育会系。明るく、竹を割ったような性格のため仲間が多く、いつも周りに人がいる。彼が書いた言葉は『全国制覇』で、サッカー部でレギュラーを目指して頑張っている。

「うん、もう大丈夫だよ。山吹にも迷惑かけたね」

「山吹、オレはお前が電話をかけたせいで酷い目にあっただぜ」

奏はすまなそうに言い、オレは文句を言う。さっきからの言動でも

わかるように、山吹は、オレと共に奏救出作戦に協力してくれた仲間である。

「そういえば、論道君の姿が見えないけど、今日は休み？」

「いや、今日の朝に上級生と何か戦りあったらしくて、生活指導部の方に呼び出されたんだよ」

「やれやれ、またか」

なるおからんぞう
鳴岡論道は目つきが鋭く、少し不良っぽい雰囲気をもってるせいで、上級生によくからまれるオレたちのクラスメートだ。

まあ、根は悪い奴ではないんだが、周りからは結構恐れられている。でも、顔はかなりイケてる方で、恐そうなところがまたイイ！とかいう女子たちの間で、かなりもてる。その人気は奏とクラスいや、学年で一位二位を争うほど。（本ッ当にむかつく。）

彼が書いた言葉は『悠々自適』。論道らしい一言だな。

「そっか、論道君にも一言お礼を言っておきたかったんだけど。心配させちゃったからね」

奏が残念そうな顔をする。正直、論道はあんまり心配してないとオレは思うが。

「（ぼそっ）……………僕も心配した」

「ん？奏何か言ったか？」

「いや何も言ってないけど……………」

おかしいな。今確かに、声が聞こえたような気がしたが。

「・・・・・・・・僕」

あたりを見回すと、前髪で顔を半分隠した男子生徒がいつの間にかそこに立っていた。

「うわっ、びつくりした」

「いつからいたんだ？」

「いるならいるって言って欲しいぞ」

奏、オレ、山吹は目の前にいる及川^{おいかわがくや}楽也にそれぞれ思い思いのことを口にする。

物静かで口数が少ないとか、あまり人といっしょにいるところを見たことがないとか、いろいろ理由は考えられるが、楽也は影が薄い、目立たないとかいうレベルじゃないくらい存在感が無い。

故に、今みたいに本人にその気はないのだが、知らないうちに現れて、よくみんなに驚かれる。

そんな彼が書いた言葉は『暗中飛躍』。人に知られないように、ひそかに活躍するという意味が・・・・まあ、ぴったりといえばぴったリだ。

「・・・・・・・・みんな、いろいろひどい」

楽也はオレたちの言葉に落ち込んだようで、とぼとぼと自分の席に戻って行くのを、慌てて追いかけて奏が慰める。よく見慣れた光景だ。っていうか、

「なあ、何で楽也まで昨日のこと知ってたんだ？」

確かあいつには連絡してないはず、というかそもそもオレは論道にだけ協力を頼んだはずだが。
そう思っ、オレは隣にいる山吹に聞いた。

「ああ、昨日お前が論道に連絡したとき、偶然その場にいたんだよ。山吹と同じくな」

「まあ、楽也は塾があつたせいで来れなかったけど、かなり心配してたぞ」

「ふゝん、そうかそうか。だから連絡してない山吹まであそこに来たのか」

「そういうこと。それにしても水臭いぞ、友人。何で奏を助けるのに俺を呼ばなかつたんだよ」

「だって、山吹は無能力者いっばんじやうだろ。実際、いてもいなくてもそんなに変わらなかつたしな。」

そう、このクラスにいる能力者はオレ、奏、論道、楽也の4人だけだ。

「酷っ！いくらなんでもそういうこと普通ストレートに言うか！」

「事実だろ」

「う、……。チクショウ！何でおれだけ能力が無いんだあ！」

山吹はそう嘆きながら、廊下に出て走っていった。（もうすぐ、HRが始まるというのに。）

オレは自分の席に着きながら、先生が来るまで一眠りすることにした。あゝ今日も平和だなあ。

さて、四時間目の授業も終わり昼休みになったので、オレと奏は一

緒に屋上へと向かった。

屋上は基本的に解放されているが、利用者が少ないので静かなところだ、オレは気に入っている。

ちなみに、山吹は部活の仲間となので今日は一緒ではない。

晴れ渡った春の空の下、オレは持ってきた弁当を広げた。

「あれ？奏、お前は今日、購買でパンを買う日じゃなかったか」

奏の両親は共働きなので、週のうち何回かは購買で昼飯を買うはずなのだが、今日は弁当を持ってきている。

「ああ、これは数日前に助けた女の子がお礼に作ってくれたんだよ」

奏よ、お前はどんだけトラブル解決しまくってるんだ。

「そうか、それは良かったな」

けっ、奏はそうやって・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・また女子とのフラグを成立させていく」

そうそう。ん？

「楽也！いつの間に来たんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・君たちが来る前からいた」

マジか！例によって、全く気付かなかった。

「しかし、珍しいね。楽也はいつも教室で食べるのに」

奏が海老フライを口にしながら、樂也に話しかける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんとなく屋上で食べたい時もある」

ああ、左様で。

「確かにその気持ちはわかる。ここは日当たり良好、風通しも良くとても静かで人が少ない。この学校でここ以上にくつろげる場所は無いと言っても過言ではないな」

突然、一人の二十代くらいの若い男性が屋上について語りだした。
(っっていうか、この男性もいつの間に来たんだ?)

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「センサー、そんなに熱く語るほど、ここに来たがってたわけじゃないんですが、っと

樂也は思ってますよ」

「十秋、わざわざ説明しなくても・・・・・・・・」

「いやあ、かくいう先生も学生の頃はよくここで・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・聞いてない」

「そだな」

「うん」

誰も聞いていないのに一人で勝手に話を進めているこの無駄に熱い人は、俺たちのクラス1-Aの担任の田端^{たばた}先生。

教師になつてまだ3年という新人の先生で、今どきめずらしい熱血漢。若いということもあつてか、生徒には親しみやすいと評判ではある。

だが、時々こうやって一人でいきなり昔のことを話し始めるというところに困っている生徒は多い。

「つと、話は変わるが鏡音、七橋、及川」

先生は急に真面目な顔をして、オレたちの名前を呼んだ。

「もう知ってるかもしれないが、昨夜に刑務所から集団脱走あつて未だ囚人の一人も捕まっていない。それどころか、足取りさえもつかめていない。その刑務所付近の町々は危険な状況下にあるので、住民に注意するようにと警告が出された。ここも、距離としてはそう遠くない場所にあるし、囚人が潜んでる可能性も0じゃないから、しばらくは警戒態勢が続くだろう。お前たちも十分気をつけるんだぞ。詳しいことは明日の緊急朝礼で校長先生が話すからな」

先生は、よく言い聞かせるようにオレたちに話した。

確かに、この辺に脱獄囚が潜んでるのなら、警告するのは当然だろう。だが、

「先生」

「ん、何だ？鏡音」

「明日話すなら、どうして今、わざわざ言つんですか？」

「わからないのか、お前たちはこの学校きつてのトラブルメーカーだからな、危ない目に会う前に釘を刺しておきたかつたんだよ」

「それは少し心外ですねー。オレはトラブルに向かつて行つてるのではなく、トラブルの方からこっちに向かつてくるんですよ」

トラブルメーカーなのは奏だけで、オレはただ巻き込まれているだけだと言いたい。

「まあ、でも用心するのに越したことはないだろ。しばらくは気を付けるように」

そう言つて、先生は屋上から出て行つた。

「やれやれ、何とも物騒なことだな」

「・・・・・・これからあまり外に出ない方がいいかも」

「そうだね。」

オレたちは弁当を食べ終え、教室に戻る途中で屋上で先生に言われたことを思い出していた。

まさか、奏の言つてた脱獄囚がこの辺にいるかもしれないなんて、物騒極まりないな。

おそらくこれからは、町の人たちにとっては不安な日々が続くだろう。

そんなことを考えながら廊下の角を曲がろうとすると、突然、ものすごい勢いのある水流が人を押し飛ばしてるのが、目に入ってきた。その飛ばされた人は壁に体を強く打ちつけて、そのままぐったりと動かなくなつた。

「はあ、いくら何でもやりすぎなんじゃないですか。会長。」

オレが、水が飛んできた方向に目をやると、そこにはすらっと背の

高い、凜とした空気を纏わせている女性、辻志季先輩がいた。

2年ながら、夕波高校の生徒会長に就任した、成績優秀、容姿端麗、運動神経もよく、IFも学生能力者警団のトップに匹敵する実力を持った完璧人間。

故に、非公式の巨大なファンクラブもあるという噂もあるほど、男女問わずに人気がある。

うちのような平凡な高校にいるのが、とてつもなく不思議な人だ。

「ん、ゆうじんか。よく私だと気付いたな。」

そりゃ、気付くわ。廊下で人に向かってIF使うのは、会長くらいだからな。

てか、そのあだ名いい加減やめい。

楽也が伸びている男に駆け寄って、大丈夫ですか、と声をかけていた。

「で、話を戻しますけど、やりすぎです会長。この人気絶してるじゃないですか」

「仕方ないだろ、この男が私に無礼な真似を働こうとしたんだ。これくらい正当防衛の範囲内だ。」

そこで伸びてる男を指さしながら、会長はさも当然といった感じで言いきった。

（いや、この男が会長に何しようとしたかは知らないが、明らかに無能力者には強すぎるだろ）

横にいる二人も、どうやら俺と同じことを思っているようで、顔が

引きつつている。(といっても、樂也の表情はわかりにくいが)

「えっと、辻先輩。とりあえずこの人を保健室に運びませんか？先輩のIFをまともに受けて、結構なダメージを負ってますし」

奏が、遠慮がちに提案する。

確かに会長のIF、液体操作をくらったら・・・ヤバいな。
リキッドコントロール

「うむ、それもそうだな。じゃあ、こいつを運ぶとするか。」

そう言っで、会長は伸びている男の襟をつかみ、ずるずると引きずっていった。

「・・・なんつか、相変わらずだな。会長は」

「・・・中学の時からまるで変って無い」

「ハハハ・・・そうだね」

オレたちは、あらゆる意味で凄い怪超・・・もとい会長という存在を再認識したのだった。

第3話 「彼女との出会い」の世界

まだ青さの残る空の下、オレは帰路に就いていた。基本、オレは帰りは一人。

奏と山吹は部活があるし、論道は……仲間と言えるのか微妙なところ。

で、オレは今、一人で帰っていたのだが……

「退けっ！邪魔だ！」

怒鳴り声とともに、オレは後ろからやってきた黒い服にニット帽をかぶった男に突き飛ばされた。

突然の出来事に、オレはその力に抗えず地面に倒れた。

「イテテ、何だったんだ、一体？」

オレが起き上ろうとするのと同時に、一人の少女がオレの目の前を走り去っていった。

「待ちなさい！その男」

そついうと彼女は、手の平を地面に押し当てた。

すると、瞬く間にそこから地面が凍りだし、さっきの男はその凍った地面に足を滑らせて派手に転んだ。

「^{キー・ブ・ガード}学生能力者警団から、そう簡単に逃げられると思わないことね。さあ、おとなしく捕まりなさい」

威圧的に彼女は言つと、その男の反応を待った。普通に考えれば男

の方が断然不利だが、

「へっ、そんなに簡単捕まってたまるかよ」

男は反抗的にそう言った。それは、虚勢ではなく確かな自信をもった響きを含んでいた。

「は？何を言ってるの」

不思議そうな顔をする彼女の前で、その男はにやりと笑うと、一瞬で姿が消えた。

「っ！しまった、逃げられた。まさか奴が瞬間移動の能力者だったとは」

迂闊だったと彼女は、がつくりと項垂れた後、犯人を取り逃がした悔しさから電柱に拳を打ち込み始めた。

（やれやれ、何かめんどい場面に出くわしちゃったなあ）

いつもなら、面倒事は避けるオレだが、目の前で起こってしまった以上、見過ごす訳にもいかない。（これは奏の影響か）オレは未だ蹴りを入れてる彼女を尻目に、ポケットから携帯を出した。

今、自分が考えている仮説を裏付けるために。

（クッククック、思った通りあの学生能力者警団の女は俺が瞬間移動で逃げたと思っている。しかし、何とか上手く騙せたはいいが、

地面が未だ凍ってるせいで、走って逃げ出せないのがつらいな）

男はもどかしく思いながらも、ゆっくりとした足取りで現場から離れていく。

（もう、この辺りは学生能力者警団が警戒するから、商売はしばらく休まざるをえんな。まあ、ほとぼりが冷めたら、また再開できるしな）

そんなことを考えながら歩いていると、男は突然後ろから強い衝撃を受けた。

（な、何だ！）

そのまま凍った地面に激突した男が振り向くとそこには、さっき逃げるときに突き飛ばした中学生くらいの少年が携帯をもって、立っていた。

（バカな！まさかこいつ俺の能力を……）

男が目をやると、その少年は満足げに頷いた。

目の前で、何も無い場所を携帯の画面越しに見ながらオレは、自分の読みが当たっていたと確信した。

そもそも、奴を瞬間移動テレポートの能力者と考えるには少々不自然な点がある。

瞬間移動テレポートが使えるのであれば、どうして追いつめられるまで使わなかったのか。最初から使えばもつと楽に逃げられたはずだ。つまり、奴の能力は瞬間移動テレポートではなく不可視インビジブル、つまり見えなくなる精神干渉系のIF能力ではないか、とオレは考えた。

仕組みさえ分かってしまえば、あとはこっちのもの。

精神干渉系の能力は機械には通じない。

故にオレは、携帯のカメラ機能を使い、奴を画面越しに見て、その位置を把握したのだ。

（おそらく、奴が最初から能力を使わなかったのもこういう理由だろう）

奴がやってきた方向は大通り、人も交通量も多く、監視カメラもある。

そんな所で能力を使っても逃げるのは容易ではないし、本当の能力がばれる恐れもある。

だから、ここに来るまで使わなかったのだろう。

（まあ、結果的に捕まっちまったら意味ないんだがな）

オレを突き飛ばしたのが運の尽き。潔く捕まりな、名も知らぬ男よ。

「くつ、まさか俺の錯覚景色が見破られるとは・・・」

「さあ、能力もばれたことだし、おとなしく捕まりなさい」

いつの間にか学生能力者警団キープ・ガードの彼女が、加わっていた。

「だが、俺の能力はこんなもんじゃないぜ」

そう言う、男は錯覚景色ミステイクビューを解き姿を現した。

「ばれちまつたんならしょうがねえ、俺の真ちからの能力を見せてやる」

そついうやいなや、周りの景色が回り始めた。

「俺の錯覚景色ミステイクビューは人の視覚に作用して、異なる景色を見せる能力。それを応用すればこんなこともできる。さあ、いつまで耐えられるかな」

男は得意げな顔をして話している間にも、景色はどんどん回つていき今自分がいる場所すら分からなくなってきた。

「うえ、何か気持ち悪い」

彼女はもうすでに立っていることすら不可能なようで、その場に手をついて倒れてしまった。

（まあ、そうなるわな。こんなの見せられちゃあ平衡感覚がおかしくなるのが普通だ）

そつ、普通なら。

「ハッハッハ、学生能力者警団キープ・ガードの女はもうダメみたいだが、お前は中々粘るじゃないか」

余裕たっぷりといった調子でオレを見る態度から察するに、おそら

く奴はこの技、スバイラルビュー螺旋景色（勝手に命名）を破られたことが無いのだ
ろう。

（だが、その油断が命取りだ）

オレは携帯の画面を見ながら、一直線に突っ込んだ。

第4話 「友人の能力」の世界

「な、何でお前は……」

男は驚いた顔をして、こっちを見ている。

今のオレは奴からして見れば、かなり奇妙に見えたかもしれない。いくら携帯の画面で確かなのが見えているといっても、もはや上下左右が全く分からない程ぐちゃぐちゃな景色の上に、足元の地面は凍っていて滑りやすい。

そんな状態で、^{ターゲット}標的に向かってまっすぐ走れるなんてことは^{いっばん}無能力者には不可能なことだからな。

「くっ!!」

男は自分の能力が効かないと分かると、一目散に逃げ出した。まあ、当然の反応だが……

つるっ、ゴーン。凍った地面の上を勢いよく走ったせいで男はもう一度盛大にこけて、地面に後頭部をぶつけた。

しかも今回は当りどころが悪かったらしく、そのまま気絶してしまった。(敵とはいえ、この結末には同情する。あまりにも哀れだ)

「しかし、結果的には助かったな」

実は、勢いよく突っ込んだのはいいが、その後どうするかは全く考えてなかったのだ。

自慢ではないが、元々オレは喧嘩にはからつきし自信が無い。

ま、“終わりよければすべてよし”というし、気にしないでおう。

「さつてと……大丈夫か」

オレは、未だ気分が悪そうな彼女に話しかける。

「大丈夫……じゃない。まだ気持ち悪いわ」

彼女は口到手を当てて、よろよると起き上った。

今まで、奴のほうにばかりに注意を向けてて気づかなかったが、彼女は結構、美人といえる顔立ちをしている。（今は気分悪そうな表情のせいで、美人には見えにくいが）

「……というか……何でアンタは……平気なのよ。凍った……地面を……滑らずに……走ってたし」

彼女は一言話すのもつらそうな感じで言った。

「アンタじゃない、鏡音友人だ。まあ、何で平気かというそれはオレのIF能力が関係しているわけだが……」

オレは自分の能力について説明を始めた。

「オレの能力は摩擦^{フレイキ}力といって、摩擦力を増減する能力だ」

「摩擦……力？」

「そう、凍った地面や油を塗った床が滑りやすいのは知ってるよな。あれは物理学の世界では摩擦が少ないというんだ。つまり、摩擦を上げてやれば凍った地面の上でも滑らずに走れる。さらに摩擦を上げれば壁を走り登ることもできる」

オレが昨日、不良に襲われたときに逃げれたのもこの能力のおかげ

だ。

「なるほど、だからアンタ、じゃなくて鏡音は滑らずにあいつのとこまでいけたのね。だけど、その摩^{フレイキ}擦力という能力があると、どうしてあの景色を見て気持ち悪くなくなるのよ」

少し気分が良くなったのか、彼女はさっきよりもスラスラと喋る。

「さっきも言ったと思うが、オレは長年この能力を使って壁とかを歩いてた。その影響か三半規管が 異常に強くなって、平衡感覚が体操選手並みかそれ以上になったというわけだ」

あの景色を見続けていると、平衡感覚がおかしくなって車酔いに似た症状が引き起こされる。

だが、人よりも強い三半規管を持つてるオレにはそんなのは効かないということさ。

「へーなるほっ」

うぷつと彼女はまた気分悪そうな表情となった。（調子に乗って喋りすぎるからだ）

「あゝ今更でなんだが」

オレは彼女に気まずそうな声で言う。

「な・・・何？」

「そんなに気持ち悪かったんなら、目を閉じときゃ良かったんじゃないのか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あゝえつと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・もつと」

「はい？」

「もつと早く言え！」

そう言われた後、物凄い勢いで正面から蹴りを入れられた・・・・・・
・理不尽だ。

その後、何分かして気持ち悪さから完全に回復した彼女は、呼び出した仲間の学生能力者警団キブ・ガードと共に、男を連行した。

聞くところによるとこの男（名前は山田公一やまだこういち）は、能力を使って万引きなどを行い、その盗んだ品物を別の場所で売りさばいていたらしい。

「しかし、あの女め、本気で蹴りやがって」

まだ、若干痛む腹を押さえながらオレは、名前の知らない学生能力者警団ガードの女を恨みながらオレは自分の家に着いた。全く、今日は散々な日だ。

自分の部屋に行つて、ベッドに横たわった時、家の電話が鳴りだした。

（何か嫌な予感がある）

そう思ったが出ないわけにもいかないので、オレは渋々受話器を取る。

「はい、もしもし」

「ああ、友人」

「奏か、何か用か？」

「うん、実は・・・」

「断る」

「ちょっと頼みたいことが、って早いよ！まだ僕何も言っていないじゃない！」

「ああ、悪い悪い。何か嫌な予感がしたもんで」

「もう」

「で、頼みたいことって？」

「うん、実はね週末に、ちょっと買い物に付き合って欲しいんだけど

「何だ、そんなことか。別にいいけど、どうせ暇だし」

「ありがとう。じゃあ、待ち合わせの場所と時間はおいおい伝えるよ」

そう言って、電話が切れた。だが、平凡な用事で会ったのにも関わらず、何故か嫌な予感が一層強まったような気がした。

第4話 「友人の能力」の世界（後書き）

やっと主人公の能力が説明されました。しかし作者である自分が言うのもなんですが地味です。

第5話 「会長vs転校生」の世界

あの事件から3日後、オレが学校に来てみるとD組にかわいい女子の転校生がやってくるといいう話がクラスで飛び交っていた。

ま、小学生じゃあるまいし自分のクラスでない（あ、ちなみにオレらがいるのはA組）ことにオレは別段興味はないが、オレ以外のクラスメート（特に男子）はかなり興味があるようで、休み時間はその転校生の噂でもちきりだった。

「なあ、友人。ちょっと見に行かねえか」

退屈な授業がやっと終わった昼下がりに、オレは山吹にそう誘われた。

「見に行くって、転校生をか？」

「そうそう、D組じゃあ大騒ぎしてるぜ。転校生の名前は片梨結^{かたなしゆい}って言うて、なんとあの学生能力者警団^{キーブ・ガード}に所属してるんだとよ」

「へーそうなんだ」

そりゃすげえな。

「な、だから見に行こうぜ」

「いやいいよ」

興味無いしね。

「んーそうか。全くお前はいつもそうだよな。自分に関係ないことは関心が0というか」

余計なお世話だ。

「じゃあ、俺は見てくるから。もちろん、後でばっちり報告しとくから」

そう言つて山吹は、教室を飛び出していった。

（別にしなくてもいいんだけどなあ）

やれやれ、と思ひながらオレは昼飯を食べるために、いつものように奏と楽也に連れられて屋上へ行った。しかし、そこではいつもと違う光景が目に入ってきた。

屋上の真ん中で二人の少女が対峙している。

ここに入学してからほぼ毎日来ている、屋上の常連であるオレたちもこんな場面は見たことが無い。

というか、ここにはオレたち以外あまり人が来ないんだけどね。

良く見てみると、二人の少女のうち一人はオレらがよく知っている会長、辻先輩で、もう一人は山田公一の逮捕の時に会った名も知らない学生能力者警団の彼女（ていうかウチの生徒だったのか）だった。

「なあ、一体何が起こってんだ？」

オレは全く状況が理解できないので、隣にいた奏に聞いてみた。

「ちょっと待って」

奏はそう言つと、近くにいた鳩に能力をかけた。

奏の獣王は対象とした動物の記憶まで知ることが可能なのだ。
ソロモン

「えっと、なんでも今日転校してきた彼女が学生能力者警団の人間で、そこで度々ウチの会長のことを耳にしていたらしく、実力が知りたいって言つて、今決闘を申し込むところなんだって」

決闘つて、いつの時代だ。つか、あいつが転校生だったのかよ。

オレたちは、弁当を広げながらこの決闘の行く末を観戦することにした。

「なあ、ただ見てるのも何だしどっちが勝つか賭けねえか」

「いいよ」

「・・・・・・同じく」

「んじゃあ、オレは会長が勝つ方に百円な」

「僕もそれで」

「・・・・・・右に同じ」

「それじゃあ、賭けが成立しないでしょ！！」

いつの間にか目の前にいた彼女にオレたちは盛大にツッコまれた。

「つて、アンタはあの時の！」

「だからアンタじゃなくて鏡音友人」

てか、今気付いたんかい。

「なんだ、片梨はゆーじんの友人だったのか？」

会長も話に加わってきた。というか会長、それは洒落のつもりなのか、だとしたら全然面白くないぞ。そして、ゆーじんと言うのはやめろ。

「いやいや、友人じゃないですよ。そもそも、オレは理不尽な暴行を加える人間との絆なんて欲しくありませんし」

冗談じゃないとオレは即座に否定する。

「あの時のこと、まだ根に持ってるの」

片梨が、ジト目で睨んできた。当然だろ、オレは最低でも一カ月は根に持つ男だからな。

「ごめんごめん。静かにしてるから、続けていいよ」

奏が険悪になりそうな雰囲気を感じて、早々に言い合いを切り上げようとした。

「つたく、そもそもアンタたちは私が勝つとは思わないの？」

「無いね」

「ごめん、無いと思う」

「………右に同じ」

「何でそうキツパリ言い切れるのよ？」

片梨が不思議そうに聞いてきた。ふっ、愚問だね。そんなの決まってるじゃないか。

「だって会長だし」

「会長だもんね」

「………会長だから」

「答えになってない！何？その会長方程式！！」

片梨は、わけ分かんないと声を張り上げた。なんで分かんないのかな？

「あゝ転校生。そろそろ決闘を始めたいのだが……」

「えっ、あつ、すいません」

言い合いに夢中になっていた片梨は注意されてようやく我に返り、いそいそと元の場所に
戻っていった。

「すいません、こっちの都合で決闘を受けてもらったのに迷惑をかけてしまつて」

「気にするな、最近には私に挑戦するような骨のある奴がいなくて、退屈していたところだ。迷惑どころか、むしろお礼を言いたい気分だよ」

会長は鷹揚と嬉しそうに返事をした。

「では、行きます。辻先輩」

「私を楽しませてくれよ、転校生」

戦いの火ぶたが、切つて落とされた。

第5話 「会長vs転校生」の世界（後書き）

奏：「ところで友人、彼女のこと知ってるの？」

友人：「いや、まあ、知ってるといえば知ってることになるな」

奏：「へー友人に学生能力者^{キブ・ガード}警団の知り合いがいたなんて、知らなかったなあ」

樂也：「・・・・・・・・・・・・・・・・何とも意外」

友人：「いや、知り合いつてほどでもないんだが・・」

片梨「もう！観戦するなら静かに見ててよね」

第6話 「決着」の世界（前書き）

戦闘描写って難しいですね。

第6話 「決着」の世界

「では、こちらから行かせてもらっ

言うや否や会長の周りに大量の水が出始め、空中を漂っていた。
相変わらず会長の液体操作は^{リキッドコントロール}いつ見てもすげえな。

周りに出てきた大量の水は、強い水流となって一直線に片梨に向かつて行った。

容赦ない一撃で吹っ飛ばされるかと思っただが、片梨は瞬時に両手を下につけると、瞬く間に氷の壁が生み出されて水流から身を守った。しかもそれだけでなく、会長の操る水流まで凍りつかせていたので、いったん会長は攻撃をやめ、距離を取った。

「ほう、中々やるじゃないか」

「先輩の方こそ」

二人は互いに、にやりと笑った。

「へへさすが^{キープ・ガード}学生能力者警団。あの会長と^{……}ともに戦えてるよ」
「……結構すごい」

奏と楽也は片梨の実力を目の当たりにして、少し驚いている。
まあ、実力はだてじゃなかったというわけか。

「会長のIFは、片梨さんのIFとは相性が悪そうだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・苦戦するかも」

確かに、水を操る会長に氷使いの相手は厳しいように見えるが、

「果たしてそうかな」

オレは、会長が苦戦するとは思えなかった。

片梨は、次々と氷柱を凍らせた床から生み出して、会長を追い詰めていった。

会長は氷柱を避けつつ、水の弾丸を放って反撃してくるが、片梨は氷の壁でそれを阻む。さらに、会長が攻撃に使った水から片梨は新たな氷を生み出し続けている。

（いける、今の私なら先輩を倒せる）

片梨は会長と直接の面識があつたわけではない。

しかし、学生能力者警団内で先輩に当たる兄が度々口にするその名前は、新人であつた片梨に“すごい人”という印象を与え、いつしか彼女の目標となっていた。

そして、いつかその人を乗り越えるためにと努力を重ねてきたのだつた。

（あいつらは私が勝てないと思つてるようだけど、何も分かつてないわね。戦いはIFの強さよりもむしろ相性の方が重要なものよ。先輩のIFでは私のIF・氷結能力には勝てない）

フリーズスキル
氷結能力、それは - 100 の冷気を操り、触れたものを瞬時に凍らせる物理干渉系のIF。液体を操る液体操作には、まさにうってつけの能力である。

「よし、このまま攻め続けていけば勝てる！」

さらに、スピードを上げて会長を追いつめていく片梨。
だが、会長はこの圧倒的不利な状況で……笑っていた。

（この状況で……笑っている？）

それは、不敵な笑みとでもいえるのだろうか。

相手の力を見極めるため、わざと互角に戦ってるような印象を受ける余裕のある表情。

（ま、まさか、会長は最初から……）

……最初から手加減していた！！

考えこむことで作ってしまった一瞬の隙、その一瞬の隙を会長は見逃さなかった。
こおりまじり

氷柱をくぐり抜け、片梨に向かって一気に大きな水流を放つ。

（しまった！）

完全に不意を突かれてしまい、氷の盾を作る時間は無い。

だが、彼女も学生能力者警団の人間。

咄嗟の事態にも素早く対応する能力をもっているため、会長が放った水流をそのまま凍らせようと両手を突き出したが、

（凍ら……ない！）

水流は何故か全く凍ることなく片梨の体を吹き飛ばし、壁に打ち付けた。

「ぐはっ！」

その一言を最後に、片梨は動かなくなった。勝敗が決した瞬間だった。

「ふむ、中々楽しかったぞ。これからも頑張つて腕を磨けよ、転校生」

会長は久しぶりに手ごたえのある決闘ができたせいか、生き生きとした表情をしている。

「それじゃあ、私は用事があるからこれにて失礼する」

会長はスタスタと屋上から去っていき、残されたオレたちは無事を確かめるために、とりあえず片梨のもとへ向かった。

「おい、生きてるかー」

「……………」

「……………返事がない」

「どうやら屍のようだ」

「誰が屍よ!!」

大きな声でツツコミを入れたため、ごほっごほっとむせかえる、片梨。

「良かった、思ったよりも大丈夫そうだね」

「当り前、こんなんです死ぬようじゃ^{キー}学生能力者^{ブ・}警団^{ガード}はやっていけな
いわよ」

どうやら、いつもの調子に戻ったようだ。ツンツンした言い方に変わってる。

「でも、悔しいな。結構、自信があっただけど」

「まだまだ腕が未熟だったということさ」

「むう、その言い方むかつく」

再び険悪なムードになってきたが、決闘で疲れ果てているのか前よりも強くは無かった。

「まあまあ、落ち着いて。あ、そういえばまだ自己紹介してなかったね。僕は七橋奏、でこっちにいるのが」

「……………及川^{キー}楽也^{ブ・}」
^{ガード}
^{ほしえた}

「あ、私は^{キー}学生能力者^{ブ・}警団^{ガード}星枝市支部所属の片梨^{ほしえた}結、今更だけどよろしく」

「こちらこそ」……………よろしく」

さて、一通り挨拶も済んだことだし、

「奏」

「ん、何？」

「そろそろ昼飯食わねえか」

めちやくちや腹減ってんだけど。

第7話 「能力」の世界（前書き）

く話だけだとさみしいので、もう一つサブタイトルをつけることにしました。

第7話 「能力」の世界

オレたち4人は今、それぞれの昼飯を食べながら雑談に花を咲かせていた。

「へー片梨さんは学生^{キブ}能力者^{ガード}警団星枝市支部のリーダーの妹さんなんだ」

「うん、いつかは姉さんを超える能力者になるのが私の目標なんだ」
「でも、会長にあそこまでやられてちゃ、まだまだ先の話になりそうだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・友人、一言余計」

それぞれが、思い思いのことを口にしながら話は弾んでいく。

「はーあ、結構自信あったのになあ。それにしても何で最後の水流は凍りつかなかったんだらう？」

「ああ、確かに」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それは謎」

3人とも首をひねっている。やれやれ、分かって無かったのか。

「あれは、会長の能力だよ」

「「「会長（先輩）の能力？」」」」

3人は驚いたようにこっちを見てきた。

「ああ、そっぴや片梨はともかく、奏と楽也も知らなかったんだっ
たな」

「いや、知らなかったって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・一体どういうこと？」

「先輩はIFを2つ持つてるとでもいうの」

そんなわけない。IF能力は1人につき1つと決まっているからな。
これ常識。

「そうじゃなくてさ、会長的能力ってどんなのか知ってるか」

「今さら何を言ってるんだよ？会長のIF・リキッドコントロール液体操作は液体を自由に操る能力でしょ」

奏の答えに、他の二人もうんうんと頷く。

「確かにそうだが、その答えじゃ半分しか正解してない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・半分？」

「じゃあ、もう半分は何よ」

「ああ、それはな・・・・・・・・」

オレは、彼らに説明する。

「会長の液体操作は液体の動きだけじゃなくて、リキッドコントロール性質も操れるのさ」

「「「性質！！」「」」」

よくハモるな、こいつら。

「そう、性質。おそらく会長は生み出した水を、凍りにくいアルコ
ールに変えて水流を放ったんだ」

「でも、私の氷結能力はフリーズスキル-100の冷気を操って凍らせるIF。
いくら凍りにくくたって」

「純アルコールの氷点は-114、凍りつくはずがない」

オレの言葉に片梨はぐっ、と黙り込んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・相変わらず知らなくてもいいような知識だけはある」

「本当、雑学に関しては一流だよな」

なんか何気なく貶されてるように感じるのは、気のせいだろうか。

キンコンカンコン・・・昼休み終了の鐘の音が響き渡った。

「あ、やばっ、早く戻んねえと午後の授業に遅れちまう」

「確か5時間目の授業は体育だったよね」

「・・・・・・・・・・着替える時間が必要、急がなきゃ」

「あ、じゃあ、また今度ね」

オレたちは、自分の弁当を片づけて屋上を後にした。

5時間目に体育の授業とは、何かとつらいものがある。食べた後にすぐ、運動するのはあまり気分のいいものでないし、体にだっていいはずがない。

「もういつそのこと、5時間目に体育の授業はしないと法律で決めるべきだと思わないか。」

「いや、僕に聞かれても・・・」

少し困った感じの声で奏は返してきた。

今日の体育はサッカーで、2クラス合同で前後半の試合をしている。オレと奏は後半組なので、前半組の試合をのんびり観戦中なわけだ。ちなみに、この試合には負けた方のクラスが後片付けを全てやるというペナルティー付きである。

「いやゝしかし、サッカーとなると輝いてるよな、山吹は」
「サッカー部の期待の新星だもんね」

校庭にラインを引いたサッカーコートの中で、山吹はドリブルで次々敵をかわし、華麗にシュートを何発もゴールに決めていた。

相手のチームにも何人かのサッカー部員はいるはずなのだが、まるで相手になっていない。

得点が6対0になったところで、さすがにこれ以上は一方的になりすぎて、まずいと思ったのか先生は山吹に交代の指示を出した。

「やべっ、ちょっとやりすぎちまったかな」

そう言つて山吹はベンチに戻っていった。いや、ちょっとどころじゃねえよ。

山吹の代わりとして他の後半組が出ることになったが、こんだけ圧倒的にリードしてんなら、もう何もしくても勝てるなとオレは思

っていた。

だが、

「オイオイなんだよ、この試合展開は」

山吹が交代するまでは6対0だったのに、前半が終わるところになると6対4と2点差にまで詰め寄られていた。

（どんだけ山吹一人の存在がでかかったんだ、このチームは）

確実にチームバランスがおかしいと思いながら、オレは後半戦に入る前に作戦会議が必要だと感じた。

さて、後半の試合が始まった。オレのポジションはGK。ゴールキーパーこれは山吹の推薦により決まったものだ。

最初に山吹が、

「GKは友人にするべきだ」
ゴールキーパー

と言ったときは、周りから非難の嵐だったし、オレ自身も少し買い

被り過ぎじゃないかなあと思ったが、次の

「攻撃側は運動のできる人間を少しでも多くした方がいい」

という言葉でみんな納得した。ハハハ・・・山吹イイイイ！！

そんなわけで、オレは（不名誉なことに）ゴールキーパー（GKを任されている。まあ、山吹の作戦のおかげか、前半よりは良い五分五分の試合となっているし、良しとするか。

（こっちは2点もリードしてるし、こりゃオレの出番はないかもな）

上手くいけば、突っ立てるだけで試合が勝ちで終わるかもしれない、とオレが思い始めたとき、

「鏡音、行つたぞ！」

味方の声が聞こえてくると同時に、いきなり前に飛び出してきた敵の一人は、ディフェンスラインを次々突破し、ゴール前までやってきた。

（ん？こいつは）

近くまでやって来た敵の顔に、オレは見覚えがあった。確か名前は・・・っと、そんなことを考えてる場合じゃない。

その敵は強くボールを蹴った。オレの少し横に向かって、一直線にボールは進んでいく。

オレはそんなに早いとは感じず、これなら止められると思い手を伸ばしたが、

「えっ？」

気付いた時には、目の前にボールはなく、すでにオレの後ろのゴールネットに入っていた。

第8話 「能力」の世界 その2

「はーあーあー」

何でこんなことになったのかと、オレは校庭の端でため息をついた。

「何、盛大なため息ついているんだ、友人」

幸せが逃げるぞ、と山吹はせつせとボールを拾っている。

「友人、ボーっとしてないで早く片付けよう」

「・・・・・・・・・終わったこと嘆いても仕方がない」

「はいはい、わかってますよ。」

奏と楽也に注意され、オレは片付けを再開する。

結果から言おう。オレたちは、負けた。

あの後、続けてゴールを2本取られ、6対7で逆転された。

だが、こっちのチームも負けじと攻撃に徹し、何とか試合終了までにゴールを1本取ったので7対7の引き分けとなり、勝敗は各チームのリーダーによるじゃんけんに託された。

で、そのじゃんけんに負けた山吹率いるオレたちA組全員は只今、後片付けの真っ最中というわけだ。

「でも、山吹^{リーダー}ならあそこでバシッと勝ちを決めて欲しかったね」

「オイ、運任せの勝負にリーダーかどうかは関係ないだろ！そもそも、友人がちゃんとゴールを守ってくれたら、じゃんけんなんてすることも無かったんだぜ」

「失敬な！ちゃんとオレはゴールを守ろうとしたぞ。止められなか

ったのにはちゃんと理由があんだよ」

そう、断じて言い訳などではなく、ちゃんとした理由があるのだ。

「へー何だよ、その理由って」

山吹が疑わしい目で聞いてきた。こいつ100%嘘だと思っているな。

「後半3本のシュートを決めたのは全部同じ奴だったろ。そいつは能力者だったんだよ」

「えっ！マジで」

「それ、本当なの、友人」

「………言い訳じゃないの」

「事実だよ」

マジだし、本当だし、言い訳でもない。大体、サッカー部でもない人間が3連続得点を決めることなんて普通に考えればおかしいことだ。
ハットトリック

「昔、あいつが能力を使ってるのを一度見たことがあってな」

確か名前は、矢木とか言ったかな。あのメンバーの1人だったけど、もう2年も前のことだから、顔を見てもすぐにはピンと来なかったな。

「で、一体どんな能力なんだ？」

「能力名は反応鈍化。スローモーション対象とした人の反応速度を下げる精神干渉系のIFだ」

オレが気付くと、ボールがゴールに入っていたのは、ボールが速く
なっていたのではなく、自分の反応速度を下げられていて速くなっ
たように感じていたから。

これじゃあ、いくら頑張ってもボールを防げるわけがない。

「でも、何だかそれってずるいよね」

「………卑怯」

「ま、別にいいんじゃない。公式試合ならともかく、これは授業の
一環、言わば遊びなんだし」

当然、授業中に能力の使用は禁止されているが、この体育の時間は、
先生の目が完全に行き届かないため、結構使ってる人が多い。（も
ちろん、テストの時や人に危害を加えるような能力の使用は別だが）
よって、体育の時間は能力使用OKというのが生徒間の暗黙のルー
ルとなっている。

「そういえば、今日屋上で会長と女子がバトってたっていう噂聞い
ただけだよ。それ本当か？」

もう噂に……。いや、あそこまで派手に暴れたら当然か。

「どうせ今日もお前らあそこで飯食ってたんだろうし、知ってるよ
な！な！」

「う、うん、まあね」

山吹の勢いに気圧されながら答える奏を見ながら、そういえば、山
吹はこういう話好きだったな、とオレは一人苦笑した。

星枝市某日某所。

荒い息遣いをしながら壁に寄り掛かる1人の男がいた。服が所々破けていて、そこから血が流れている。

「はあはあ、くそっ！！一体何なんだ、あいつらは」

幸運にも娑婆しやばに出られたと思った矢先、男は急に変な奴らに攻撃された。

そこからはいくら逃げても奴らは現れ、追いかけてくる。もう男は体力・精神力共にボロボロの状態となっていた。

（くっ、こんなことなら、先にあいつらと連絡を取っておくべきだったか）

男は脱走したときに、散り散りになっていった仲間を思い浮かべていた。

あいつらも今の自分と同じ目に会っているかもしれないと思うと、何ともやりきれない気持ちになる。

（とりあえず今はあいつらに見つからないように隠れて、傷と体力を回復することに専念しよう。そうすれば俺のIFで……）

男の意識はそこで途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8191x/>

I F 「仮定」の世界

2011年11月9日19時09分発行